

日 時：平成30年11月21日（水） 午後1時から午後2時30分まで

場 所：水前寺共済会館グレースシア2回 孔雀

出席者：蒲島 郁夫 知事、宮尾 千加子 教育長、木之内 均 教育委員、
堀内 忍 教育委員、吉井 恵璃子 教育委員、吉田 道雄 教育委員

議 題：英語教育の目指す姿（グローバル人材の育成のために）

【蒲島知事】

ありがとうございました。

英語教育については、委員の皆様のご意見をいただきながら策定した、熊本県教育大綱にも「ふるさとを愛する心を持つグローバル人材を育成する」と掲げており、英語教育日本一を目指した取組みを進めてきました。ただ、事務局から説明もありましたように、生徒の英語力は、資料5に記しておりますとおり、2年から3年前まで全国でも最下位クラスでありました。それが昨年度になってようやく伸びが見られるようになってきました。私は最下位から抜け出した時、うれしくて教育長にすぐ連絡したことを覚えています。しかし、まだ全国平均には届いていない状況です。ただこの伸びを続けていけば、全国平均どころか、それを抜くことは可能だと思われます。

今後、学習指導要領の改正や大学入試改革においても、英語におけるコミュニケーション能力がこれまで以上に求められてきます。そこで、このような状況を踏まえ、英語教育の目指す姿、グローバル人材育成のためにについて、この会議の議題に用意させていただきました。

それではまず、各委員からそれぞれの御意見を伺いたいと思います。

木ノ内委員から2～3分程度でお願いし、順番にこれから回していきたいと思います。

【木ノ内委員】

それでは、私の方から述べさせていただきます。

まだ、本県生徒の英語力が平均には達していないということですが、随分上がってきているのはいい傾向かと（思います）。ただ、まだまだALTなども九州の中で配置が少ないなど、そういう特徴的な問題については、教育委員会でも前向きに捉えて、整備してもらうことが大切だと思います。もう一つ、私が思うのは、日本では、基本的に海外の人種の差だとか、例えば宗教などを教育であまり取り上げない。難しいことなのかもしれませんが、こういうものが課題に上がらない。ところが、私も海外に1年いましたが、やはり、色々な人種がいるし、考え方や宗教など、こうした違いというのは避けて通れません。是非、そういうこともグローバル人材育成の一つの要素として、もちろん、英語教育は大事なことなのですが、そうした海外の人たちのものの考え方などについても、ある程度知識を持つというのは大事ではないかと（思います）。特に今、アジア圏の中だけでも、中国の方などが、この熊本で相当増えていますけど、やはり考え方が、国によって違ってきます。特に最近、熊本にしてもMOUを結んだことで、インドネシアとのつながりも増えて

きた中で、どの段階で取り入れるかは別として、(こうしたことを) 考えておくことが必要(と思います)。特に、自分たちがきちんと海外でものを言えるようになるんだというのが一番大事な部分で、こうした部分を少し勉強しない、いざ海外でいろんな発言をするときに困る、というのを少し感じています。是非、そのようなことも検討した上で、計画に取り入れていただければと思います。以上です。

【吉井委員】

吉井でございます。よろしくお願いいたします。

私は、留学とALTをテーマに話をさせていただきます。

まず、留学ですけれども、私の知人に現在大学2年生のお子さんがいらっしゃいます。大学に合格してから、これまで3回留学をされました。話を聞きに行きましたが、最初はすごく嫌がっていたけれど、この冬に4回目の短期留学をされるそうです。行ってみたら、同じアジアの人間でも日本人はすぐわかる、顔はみんな同じなのに、と言ってました。なぜなら、日本人はとてもおとなしい。また、おとなしいのが美德だと思っているのは日本人だけだと言われて、ショックを受けて帰ってまいりました。どこの外国の人も、いろんな留学生がおられて、皆すぐに手を挙げて質問をしたがる。でも日本人は全然それをしないと。それが本人はとても気になっていたらしくて、2回目からは自分が一番質問をするというつもりで、質問を準備して行くようになったそうです。自分で質問を考えて、それを英語で質問をすることで、まず、自信がついて積極的になれたと。それを周囲の人に言わせると、とても本人の視野が広がったような気がするということでした。その例を見て、留学という体験は若者をとても大きく成長させるものだと思います。たくさん留学したいと思う若い人たちが増えてほしいと思います。そこで、資料の7番ですが、高校生が留学したいと思わない理由という項目があります。1番は先ほどおっしゃったように、「言葉の壁」があるわけなのですが、3番と5番に「留学方法や友人関係に不安がある」ということと、「留学に関する情報が少ない」ということがあります。この2つを足すと、「言葉の壁」に匹敵する数になります。つまり、留学に関する情報、詳しい情報があまり出ていないということになります。経済的支援などたくさんの支援策もあり、その知人も、「こんないい制度がたくさんあって、それをどんどん活用して家の子供は海外に行っているのに、皆なぜしないのだろう。」と言っていました。恐らく、教育委員会、他の課、そして、民間も含めていろいろ(支援策が)あるのに、思ったほど知られていないのではないかと思います。もっと周知することで、せめてこの「留学に関する情報が少ない」という部分は無くすようにすべきだと思います。せっかくの支援策がもったいないので、周知をして高校生に海外に行ってもらいたいと思います。

そしてもう一つのALTに関してですが、これも、資料7番の1番にあるんですが、「言葉の壁」が大きいということで、これもやはり改善しなければなりません。知人に、元JICAの職員さんで、元々英語とフランス語が喋れる方がいらっしゃるのですが、フランス語は全く使わないので全然喋れなくなっておっしゃっていました。やはり学んだものを使わないと忘れてしまうんです。英語を学び、外国語を学び、そして使う状況を作ることが必要です。外国人と話すきっかけ、チャンスを作ることが大事だと思います。高

森町はされているようですが、資料にも記載されておりましたように、イングリッシュキャンプというのがあります。高森町同様に、このイングリッシュキャンプを各市町村でできるようになれば本当にいいことだと思います。勉強ではなく、会話であり、生活の中に普通に英語を取り入れてほしい。綺麗な英語を喋る、外国語を喋るALTの方が欠かせないと思います。英語を使う状況が普通にある、そんな熊本県であってほしいと思いますが、それを実現するには、やはりALTは欠かせないと思います。言葉を使うということは、同時に海外の文化も学ぶということです。自ら地元の文化も知って欲しいし、それをまた伝えてほしい、そして海外のことも学んでほしいと思います。私の願望ではありますが、外国語を学ぶ、学んでそれを使う。使うことができればそれで何かを伝える。そして、伝えることができたなら、相手の言葉も理解し、理解しあう。理解しあったことでまた深く学ぶという、いい意味の循環ができればいいなと思います。

日本の文化を、地元の文化を自分の言葉で語ってほしいと思いますし、同時に海外の文化も学んでほしい。そしてそのためには、「学びを理解する力」と「違うものを受容する力」も必要だと思います。このような取組みにより、海外も日本も、こういう壁を一切取り払ったグローバリストが育っていけばいいのかなと個人的に思っています。以上です。

【吉田委員】

吉田でございます。

吉井委員が海外に行かれた方についてお話しされたので私も思い出しました。

先ごろイギリスに行った友人が、アジア系の顔をした人が大勢いた中で、あなた日本人でしょと言われたそうです。その時の解釈がとても面白かったのです。日本人は相手とコミュニケーションをとる際にわずかに会釈をする。これが日本人に特有だと思われるというのです。これは人に対する思いやりや感謝を表現するものですから、それで日本人が見分けられるのはいいことだと話しました。そうしたことで、海外の文化を学ぶと同時にこちらもしっかり発信していくことが大事だと思います。その点、資料1の「英語による発信力を高めること」について評価できます。この発信力をさらにコミュニケーション力、そして対人関係力の育成として考えていただきたいと思います。その結果として、外国人も含めて、日本人が人と人とのかかわる力を身につけていくことを目標にしていきたい。

これは11月2日ですが、砥用中学校でスーパーティーチャーによる英語の授業を参観しました。がありました。ご担当の先生は研究会の時に「少しは準備しました」と笑っていらっしやいましたので、それなりに準備をされたとは思いますが、それにしてもすばらしい授業でした。私たちが中学校で学んだ時のレベルとは比較にならないレベルの高さでした。先ほど吉井委員が言われましたが、ALTも素晴らしかったですね。我々と変わらないアジア系の容貌でしたが、ルーツはベトナムで国籍はアメリカでハワイ出身のようでした。校長先生によれば、出勤簿の押印もきちんとするなど、「彼の方が日本人らしい」と笑っていらっしやいました。人当たりも柔らかく和やかな雰囲気をつくっているそうです。そうしたこともあるのでしょうか、生徒たちも自信を持って英語を学んでいる姿が見えました。私たちの年代は、英語を学ぶと自信を失うほうが多かったと思います。

公開授業を見て、できれば地元の住民や企業の方にも授業を見ていただくと良いのではないかと思いますし、地域の人たちから自分たちの英語力が評価されることで、さらに自信を持つことができるでしょう。また、企業等におけるインターンシップなどでも、外国人の方が働いておられる企業などに出かけて交流と相互理解を促進することも大事だと思います。

私は心理学の仕事をしていることから、「3K」の重要性を強調しています。「3K」は、「きつい」、「汚い」、「危険」な仕事を指すものとして、一時は流行語のようになった問題のある表現です。これに対して私の「3K」は「心」「行動」「言葉」で、この3つが人生を回す大事な歯車だという考えです。そして、3つの歯車は密接不可分で、しかもどれから動かしても人生は回ると考えています。とくに、言葉が心を動かし、それに生き活きた行動がついてくることもあります。そういう点からも、日本語はもちろんですが言葉というコミュニケーションの道具を対人関係づくりの基礎力として教育していただきたいと思います。また、グローバル化は外国に行くことはもちろんですが、グローバルな企業や関係者の方が授業に関わっていただくと良いですね。そうした機会を通じて子どもたちを評価されたり、アドバイスをいただいたり、さらには積極的に手伝っていただくようになれば良いと思います。

それから、資料5のデータに関してですが、いじめの場合も県別の統計は公表されますが、評価の基準が必ずしもはっきりしないところがあります。そういう意味では、この場合も、他県とサンプリング方法が共通しているかどうかなども確認しながら比較することが求められます。700人分の受験の補助で改善が見られたということですが、能力県としての改善や変化を客観的にきちんと押さえていくことが大事だと思います。

【堀内委員】

すみません、堀内です、よろしくお願いします。

私には、高校1年生の息子がおりまして、まさに、今年の夏、ニュージーランドに2週間、修学旅行兼語学研修ということで、海外留学に行って参りました。先日、一緒に行った友達が4~5人うちに遊びに来ましたので、その子たちに、ニュージーランドはどうだったというところも含めて、「日本人は英語が苦手って言われているけどどうしてだと思う」という質問を投げかけてみたのです。そうしたら、「英語を普段、学校とか生活で英語を普段使う必要がないから、だから、使わないから英語がそんなに上手にならないんじゃないかな」ということとか、あと、「学校で結局教えてもらう英語って、試験のための、大学受験だとか中間考査、期末とかそういう学校の試験のための勉強という風に感じるから、自分で使えるという英語を学ぼうという必要がないのかな」と。コミュニケーションとしての英語という認識がやっぱり低いということを感じました。あと、「英語を使うところがないから、英語を喋れないんだよ、喋らないから結局学校で学んだことを生かす場がない」ということを言われました。まさしく、本当に生の声だったので、今の高校生ってそういう風を感じているのかなと（思いました）。4~5人だったので、すべての高校生がそうは感じていないとは思いますが、中にはそう感じている子たちもいるということで、ちょっと親としては授業料を払って学校にやっているのに、試験のための勉強が

あると思われるところが何とも寂しい感じがいたしました。

そのあとで、ニュージーランドはどうだったということで、話を少し聞きました。やはり資料7の4番にあるとおり、高校生が留学をしたいと思わないという一番最初ですね、「言葉の壁」があるからというところが挙がっていました。最初行く前は英語が通じるかどうかすごく不安だった。だから本当にもう行きたくない。なんでこんな語学研修なんてあるんだろうという風に思っていた子が大半だったみたいです。でも、いざいやいやながらニュージーランドに行ってみると、意外に単語だけでも会話ができる、表情から読み取れるという、なにか思っていた以上に、「意外とコミュニケーションとれるじゃん」というような感じになったようです。それで、現地の高校に入りながら、正味10日間なのですが、中高生と交流しながら語学研修をしまして、むこうで中高生達とも色々ディスカッションをしたり、英語で色々コミュニケーションを高めていったのですが、うちの息子が言っていたのは、「言葉が上手に話せなくても、気持ちって伝わるんだよ。一緒にゲームをやったり、色々現地のダンスを教えてもらったりしながら、一緒にやっていると、同じようなところで笑って、同じようなところで、やはりみんな感動したりする」というようなことでした。なにか、みんな英語がしゃべれないというところに固まりすぎているのかなと、一步を踏み出すと、意外と簡単じゃないのかなというところを、私たちは子供たちに教えきれていないのかなと感じました。なので、やはり普段から英語と触れ合うことが大切かなというのを息子の友達と話しながらすごく感じたところでした。

先ほど、吉井委員もおっしゃっていましたが、そういう意味では、ALTという存在は、とても重要になってくるのではないかと考えております。一番身近にいる学校の中で一番身近にいる外国人といえば、やはりALTになると思います。ALTと普段、学校生活を共にする。廊下ですれ違った時にちょっと自分が授業で習ったことを実践してみるとか、身近にすぐ、そういうことを実践できる人がいるというところが、子供たちにとってもとてもいい環境ではないかと思っております。そこで手ごたえを感じた子供達がもうちょっと勉強してみようとか、もうちょっと覚えてみようというふうに、やる気を引き出すきっかけにもなるのかなと考えております。そういう意味では、私の希望でもあるのですが、ALTだけでなく、今、スカイプを使用すれば、遠距離でもパソコンを通じて英語の会話等もできたりすることもありますので、すごく難しいことだとは思いますが、海外と姉妹提携校を増やしていただきながら、何か月に1回でも2回でもいいんですが、そういうところと交流を持って、勉強ではなく、触れ合いという英語の場を作ることがすごく大事だと思っております。

そういうことで、コミュニケーションをしていく上でやはり、豊かな思考力というんですか、やはり子供達にいろんな発信の仕方があるんだ、いろんな英語の学び方があるんだという考え方を発信できて、子供達も、そういう意味では、いろんな、一つの勉強の仕方じゃなくて、英語を学ぶためにはいろんな学び方があるんだということを教えてあげられるきっかけになるんじゃないかと思っております。

あとは、街に出てですね、熊本は熊本城、水前寺公園とありますので、そういう所にも授業でポンと飛び出して、そこにいらっしゃる海外の方に少し説明を英語でしてあげる、観光案内をしてあげるといようなことができるようになればすごく理想だなと思って

おります。個人的にそういう風な高校生が増えてくれるとうれしいなという気持ちでおります。

あと、最後に1つ、やはりセンター試験が変わるという所で、うちの息子が高校1年生になります。ちょうどまさしく大学受験の時に、英語に関しては四技能というかたちが入ってきます。そして、学校の説明では、英検等については高校3年生の時点で取った級しか反映されないというようなことです。資料5では「準2級を目指して」と書いてありますが、やはり2級までとったほうが安全だというような話を保護者間でよく聞きます。そのあたりを、英検やセンター試験に代わる四技能というところが入ってきた時点で、どのように授業内容を対応させながら進めていくかという所をしっかりと決めて、こちら側からも色々な情報を発信して行って、本当に受験になった時に、受験したい子達がこういうところで受験できない、受験するのをあきらめてしまうというようなことにならないようにして行ってほしいと思っております。

長くなりましたが、これで終わります。

【宮尾教育長】

宮尾です。少し現実的な話で、教育を充実させるということは、まさに未来への投資なんだなというのを今日配られている資料を見ながら、つくづく思いましたので、それをベースにしてお話しさせていただきたいと思えます。

入試制度が大きく変わると、英語力が必要だということは誰もがわかっているけど、その英語力をどうやって測るか。おそらく物差しは一つではなくて、いろいろあるんですけど、その一つが、英検ということでしょうが、英検は受験生も多分一番多いし、おそらく郡部とか地方の人たちも一番受けやすいシステムになっている。価格も安く受けやすいということで、今熊本県もそれを中心にしているのかなと思っています。英検を補助したら英語力が伸びるのということをよく聞きますが、それは一律に言えることじゃないのかもしれない。ただ他方、今回弘済会さんから300万だったと思えますけども、支援をいただきましたら、それで受験をできる生徒が700人位いて、ぐっと受験生が増えたので順位も上がったということから、やっぱり目標があると子供達って、やっぱり頑張るんだなってつくづく思いました。「3,000円位じゃないの」という意見もあるのかもしれない。ただ、英検の受験料は3,400円位なんですけど、やはり今、経済格差がすごく進んでいて、色んな校長先生や教頭先生の話だと、今の一番の学校の課題は何ですかという問いに、やっぱり「2極分化」と言われます。「経済的に、しっかり教育にお金をかけられるところと、例えば一人親世帯であったり、経済的に厳しくて、十分なケアができないというところと、すごく2極分化がひどくなっています」とよく言われます。そういう中で英検の3,000円とか3,400円に対して負担感があるということで、教育の機会均等といえますか、そういうものへの対応も私は必要ではないかと思っております。機会を与えられるような環境ができればなと思っております。ちなみに、福井県は教育県で有名ですけれども、福井県は中学校3年生に年1回、英検、全ての生徒に英検全額を支援しております。福井県は断トツ1位の英検で、それも英検3級相当ではなくて、実際に英検の試験を受けますので、英検の取得率が断トツ高いという実績も出ています。やっぱり子供達ってそういう機

会を与えられると力を発揮するものだということを改めて感じるところでございます。

それから、資料7で留学生等の話があって、少しですけれども、留学生だったり短期留学生だったり、修学旅行が増えてきています。今日、私、1つ申し上げたいと思うのは、やっぱり子供達の力をすごく感じる場面が、留学も素晴らしいのですけれども、資料の4の「本県の取組み」の右の一番下の高校（に関する記載）の海外研修、留学、進学促進の中で、専門高校生による海外インターンシップ事業というをやらせてもらっていて、これは、企業からの寄付をもとに、チャレンジ基金でさせていただいているのです。本当にありがたい制度で、これ3年目なんですけど、1年目は工業系の子供達がアメリカの平田機工とかボーイング社に行ったと、2年目は家庭科とか福祉の分野で北欧に行き、3年目は今年度で、農業でオランダとかドイツに行っただということなのです。子供達10人足らずで、全部高校が違う専門高校の生徒なんですけど、みるみる、めきめきスキルを上げていきますし、プレゼン力も高まります。本当に、さらされたり、必死になるとこんなに人間で変わるのかなと改めて思います。

とても嬉しかったのは、1年目に行った工業系の子供たちは、ボーイング社に行って、それに感化されて、一人は航空系の進学をした、一人は三菱重工の航空宇宙システム系の会社に就職をしたという、本当にちょっとしたきっかけでこんなに子供たちの夢が広がるのだということを体感したところでございました。そういった意味で、やっぱり子供たちにそうしたチャンスとか機会とかがあれば、必死になって夢は広がるのだなということを改めて感じました。そういった意味で、引き続き子供たちへのそういった支援は充実させていければ良いなと思っております。以上です。

【蒲島知事】

はい、ありがとうございます。今のご意見に対して、何か付け加えるご意見がありましたら、お願いします。

私は、今、宮尾教育長がおっしゃったように、なかなか夢に予算を投入しないというのが役所じゃないかと思うんですね。漠としたことにあまり、予算を投入しない。そういう時代はもう過ぎて、今は、おっしゃったように福井県は全員が英検受験している、機会を与えているんですね。チャンスを与えるということがとても大事な気がする。それでどんな風に伸びますか、どれくらい伸びますかということも具体的に計れないかもしれないけど、少しでもチャンスを持ってない人たちにチャンスを与えることがとても重要な教育ではないかなと（思います）。財政課には、どんな効果がありますかとそういう（確認があった）時に、夢に投資すべきだと知事が言っていましたと（言えばよい）。そういうことがこれから求められている気がします。そして、受験料もほら、一度試してみればいい訳ですよ。今回も補助が得られたから…。

【宮尾教育長】

33位です。

【蒲島知事】

このような効果がある訳ですから。福井県は1位なんですよね。私が英語教育日本一を掲げているので、来年度一回、少なくとも33位まで行ったので、全員にやってもらえれば（いいのでは）。早くアナウンスしないといけないですよ。直前になってやりますから手を挙げてくださいと言ったって…。来年度の英検をいつみんな一緒に受けましょうとね。そしたら目標が1年あるのできっと。機会を与えてやろうとするといいよね。

【宮尾教育長】

クラスとか、学校全体で機運が盛り上がるかと（思います）。

【蒲島知事】

せっかく福井県みたいな先進県があるので、何もやらずにやっぱりダメでしたではなくて。これやったから33位まで（上がったのだから）、きっと良い効果があると思います。ぜひ皆さんにお願いしたいなと思います。他にありませんか、自分だけ付け加えたけれど。

【吉田委員】

知事のお話に関連して、私は本来否定的な意味である「朝令暮改」に大賛成だと言っています。そもそも何もしないで「やっても無理」というのでは思考も行動も停止状態だと思います。「やってみてダメだった」ら、その時点で元に戻せば良いのです。全員が合意してやってみましょうよと踏み出すことが大事だと思います。そうでなければ、何事も前へ進みません。その意味で、知事からとても力強い御発言をいただきまして、ありがとうございました。

【木之内委員】

うちの大学でもそうなのですが、よく帰国子女の子たちが帰ってきて、なかなか日本の学校や日本の社会の中に溶け込みにくいという話を聞きます。実際そういう話をするお子さんが多いですよ。むしろ、そういう外国で本当に経験を持っている子なんかは、何か立ち位置というか「場」を学校の教育の中で少しクローズアップして、つくってあげる。そのことによって、海外のことを知っているからこそ主張がきちんとできれば、一般の日本の生徒さんにとってもプラスになるのではないかと（思います）。それと、これはおそらくやられているのだろうと思いますが、日本人学校で教鞭をとっていた先生方、この方たちはすごく色々な経験をしておられますが、たまたま赴任しておられる学校では当然話すのでしょけれど、ちょっと違った学校にも行ってもらって実態を話してもらおうとか（どうでしょう）。そうすると非常にリアル感もあるし、生徒さんが身近に感じられるのではないかと思います。ある意味、今ある資源みたいなものを（活用する）。ALTの方たちで拝聴していくことも大事ですけど。後は、強いて言えば今これだけ海外の人たちが地域に入って、結構いらっしゃると思うので、何らかの形で海外から来ている人たちをうまく教育の中に取り込んでいくとか、そういったことも身近にやっていると案外距離感が縮まるというか外国語を勉強するということに対する抵抗感が薄れるのかなと感じます。そ

ういう機会が色んなところであれば良いなと思います。

【吉井委員】

先ほど木之内委員もおっしゃったのですが、海外に行って、とりあえず言葉はしゃべれなくても心は通じる、その体験は私もしたことがあります。水俣には JICA を通じて環境を学びに来る海外の方がいらっしゃいます。この方たちに、私たち、近所のおじいちゃんやおばあちゃんなどが料理を作ったり、竹細工を教えたりするのですが、言葉は全然通じていないのに分かるのです、何を言っているのかどこを喜んでいるのか。終わった後にはおじいちゃんたちが「何を言いきるか、言葉は全然わからんばってん、心は通じるもんな。やっぱり人間同士やもんな。」とおっしゃるのです。理解しあうというか、言葉は本当にツールであって、理解するのは心の中だと思うのですが、ただ何を伝えるかという文化（なのです）。それを教え、そして学ぶという一致があるので、伝えられるのだと思います。せっかくなら交流する、自分たちの独自の文化をしっかりと学んでもらって、その文化を伝えるという努力をしてもらえば良いかなと思います。自分の文化を伝える、そして相手の文化を学ぶ、お互いに学びあって豊かな交流があると良いのかなと個人的には思います。

【蒲島知事】

どうもありがとうございました。それでは、皆さんのご意見にもありました、ALT について少しご意見をいただければと思います。ALT をどのように活用していくか、あるいは ALT 確保後の課題などについて何かご意見をいただければと思います。

【宮尾教育長】

ALT は今、九州の中でも厳しい状況で、先ほど事務局の方からもありましたように、議会でもこれで良いのかという厳しい御意見をいただいております。これを何とか増やしていきたいという思いがございます。一つは、これまでの自分たちの反省を述べますと、教育委員会の予算というのは、ほとんどが人件費でございます。何かものをつくったりということではなく、ほとんどが人件費であることから、いろんなシーリングですとか、三位一体改革の削減の中で、（その対象となった）ALT が厳しい状況になってきているということで反省しているところです。そういった意味で、今 23 人が 50 の県立高校に複数をまたぎながら、特別支援学校も行っているのです、これを何とか希望としては倍増ぐらいにしていきたいなという思いはしております。やはり、先ほどからお話があるように、接することで異文化とか語学とか空気感をつかむということが絶対にあると思います。残念ながら熊本の学校には外国人が増えてきたとはいいいながら、そこまで日々の生活で会うほどではないので、願わくば一つの学校に一人ぐらいいて良い気がするのです、これも繰り返しになりますけど、子供たちに日々の外国人とのやり取りを体験させたいと思っています。

それから、もう一つの課題は、ALT 単独での授業というよりも、英語の教員がどう ALT を活用するかという、ある意味英語の教員のスキルが必要となってくる部分もございます。

どういう授業をしてもらおうかということ、ミーティングで議論したりしてという部分です。そういった意味では英語の教員と ALT とのコミュニケーションも十分必要となってきますので、それにより良い授業を進めてもらえるようになりたいなと思っています。

【堀内委員】

私もぜひ、ALT の増員はお願いしたいと思います。先ほどから話が出ておりますけれど、今高校 1 年生の子が高 3 になった時点で、英語の受験、センター試験が変わるということで、やはり喫緊の課題じゃないかと思っています。特に英検等の外部試験、民間試験を考慮されるということで、そういうところのフォローをしていただく方というのは、学校の先生以上に必要になってくるなと思います。特に英検などは面接の試験が入ってきます。3 級以上になりますと英語で面接をしてそれで合否を決めるようなところが出てきますので、やはりそういう練習の積み重ねだったり、そういう場に慣れておくという体験がとても必要だと思います。そういう意味では、やはりなかなか学校の先生だけではフォローが不十分になるかと思っていますので、ぜひそういうところを ALT の先生と一緒にやっていただいて、より多くそういう場を子供たちが経験できるという必要が出てくるのではないかなと思っています。

本当に今、私もとても不安です。後 2 年後、全く変わってしまうセンター試験に親子ともどもどういうふうに対応していったら良いのだろうと。特に英語が本当に大きく変わりますので、本当にうちの子が大学に行くための民間試験の合格ラインを取れるのかどうか、英検は年 3 回ありますけれども、その 3 回のうちに本当に合格できるのか、高校 3 年の時に受験した結果しか反映されないということになりますと、今 1 年生ですけど今の段階から毎回毎回とにかく民間の英検等を受けさせて、とにかくそれに備えないといけないのかなという、焦りばかりが募っております。ぜひそういう保護者の焦りというものも、私だけではなく今高校 1 年生をもたれている保護者の方は多くの方が抱えておられると思いますので、そのあたりも情報として、うちは ALT がこういうふうなサポートをしてくれまますよというような情報を学校からいただければ安心するという部分もあるかと思っていますので、ぜひ ALT の活用というところも視野に入れて考えていただければ嬉しいなと思います。

【吉田委員】

私は 20 年ほど前にオーストラリアで 6 か月間滞在したとき、非常に感動したことがあります。

お年寄りから中年、そして若い人たちから、この外見の私が道を聞かれたのです。私たちが子供の頃は、オーストラリアは白豪主義だと教えられていました。しかし今では移民の国で、容貌や肌の色では区別されません。そうしたことを考えると、ALT の採用なども幅広く考えるといいでしょう。

派遣は中央で決められると聴きましたが、こちらの希望などがどのくらい言えるのでしょうか。いわゆる外見からどう見ても英語を話す人だけでなく、見た目にはわれわれアジア人の顔をしていて英語でしっかり生活できる方なども欠かせないと思います。肌や髪

色とは関係なしに、いろんなALTの方が来ていただくことができれば良いですね。

【吉井委員】

ALTまで先ほど全部言ってしまいましたので、言うことがありませんが、子供たちには、生の外国語をしゃべる人の言葉のシャワーを浴びるように育ててほしいと思います。その時は変わらなくても、シャワーを浴び続けることで、ある日突然、英語が「分かった」という瞬間がきっとあると思います。そういうことをALTの皆さんには期待したいと思います。

【木之内委員】

ALTは、間違いなく、皆さん同感で必要ですけれども、どういうレベルの資格がないと選ばれないのかとか、その点については、私も詳しくありませんが、先ほど話に出ましたとおり、文科省の方からということになると、色々な課題もあるのでしょうか。確実なALTだけではなく、例えば結構留学生が来ていたりします。そういう人たちに補助的に入ってもらえるのが可能なのかとか、もちろん正式に派遣されて来ているわけではないので難しいかもしれませんが、部分的にそういうことを考えることも、むしろ身近な形で良いのかなと思います。

ただ、なかなか予算の問題でどうすれば良いのかというのは大変なんでしょうけれども、皆で一致団結して増やす方向で頑張っていけたらという思いでおります。

【蒲島知事】

はい、ありがとうございます。私もこのALTについては、今、倍増とおっしゃったけれども、倍増しても46人だから遠慮は良くない（と思う）。50校だったら、50人にすればたぶん九州一になるはずですよ。だから92～93%で止めようという、そういう気持ちではなく、全校にチャンスを与えて（もらいたい）。

ここにALTがいる8校がありますよね。この人たちの検証の結果はどうでしょうか。一定の効果が出ていますか。

【宮尾教育長】

先ほど私が言いそびれたことがありました。重点配置校が8校ありますが、その中で3か年間の英検の取得者についてなんですけれども、準1級、2級、準2級で、1年目は1,050人、2年目は1,230人、3年目は1,285人と、確実に配置校については実績が伸びているというデータがございます。それから英検にばかりこだわってもいけませんので、資料6ですけれども、取組事例の中で、英語の授業以外でのALTの活用がございました。私たちは、ALTは英語の授業をやってくれるものと思っていますが、小中学校で給食に入ってもらったり、高校の例ですが、理系専門のALTで、理科の実験を英語で教えて、生徒たちがそれを一緒にやったりというような、いろんな活用の仕方があるんだなと思っています。

それから、さきほどALTの基準の話がありました。今いろんな民間も含めたところ

で英語を教える方が来日するシステムがありますが、やはりA L Tがある程度コストはかかりますが、信頼性が高いということで、我々はA L Tを目指していきたいなと思っています。

【蒲島知事】

はい、ありがとうございます。A L Tを配置したから点数が上がるわけではない。配置して、目標を持って、機会を与えてというのが同時ですね。

それからもう一つ英語力の強化に向けて、英検の受験機会を設けることというのもありました。私も賛成なのですが、これについて自由に御意見をお願いしたいと思います。

今度は木之内委員からお願いします。

【木之内委員】

先ほど知事もおっしゃったとおり、平等に機会は与えたほうが良いと思います。それを英検だけに絞るのかとかはあるのかもしれませんが、入口としては英検でいいだろうと思います。

これを受けなければいけないと子どもたちが思うと、それなりに勉強すると思うのですよね。試験がないとなると、どんな学生でもやはりのんびりしますから、そういう意味も含めてある程度義務じゃないですけれども、制度化してしまうというのは、かえって学生たちが本気に勉強するきっかけづくりになると思います。ぜひこれは全高校生が年に3回あるうちの3回ともというわけにはいかないでしょうけれども、1回どこかに目標を確実に絞ってやるのが一番良いのではないかと思います。

【吉井委員】

私も賛成です。きっかけもそうですが、チャンスに平等に与えるということ、チャンスがあるということ、それにチャレンジするという。受けなくても良いと思うよりも、受けなくちゃいけないと思う緊張感の違いもあります。それが実現することで、英語に対する距離が縮まれば良いかと思います。それも必要ですし、本当に小さなところから英語に親しむことで、英検を受けるのが当たり前という感覚になってくれれば良いと思います。

【吉田委員】

テストや検査は、できる限り楽しく受けるのが良いですね。そうしたことから、教師の力が問われると思います。先生方の影響力で、子どもたちが「また英検か」ではなく「今度の英検は頑張るぞ」という気持ちになる。子どもたちにとって目標が明確になって、自分の力を試すチャンスだと捉えられるような働きかけを教師たちができることが大事です。これは親にも当てはまります。

こうしたものは、自信をつけるために活用するのが何よりです。知事からも非常に力強いサポートの御発言をいただいていますので、福井の100%と同じ水準に達しようという気持ちになってきました。

【堀内委員】

私も先ほどからお話をしているように、目標を持って、英検のチャンスを与えるということについては大賛成です。これは余談になりますが、忘れっぽい子供を持つと、英検の申込書を持って来ても、結局それがカバンの中に入ったまま、結局3回とも受けられないというケースもあります。学校で年1回、みんな同じようにチャンスを与えて、目標を持って、そこに向かって勉強していくというところが、とても仲間意識として皆で頑張るとい、先ほど吉田委員もおっしゃったように皆で楽しくそれに向かって学ぶ姿勢が大事なと思います。

ただ、集団で受けるとなると、合否が出たときに、やはり級に合格できなかったという子供たちも出てきますので、合格できなかった子供たちが負い目に感じないというか、やる気を失くしてしまわないようなフォローというの、学校の先生方には大事になってくるかなと思いますので、そのあたりのことも十分話し合いながら、そういうところに向かっていければ良いのではないかと思います。

【宮尾教育長】

色々な不安はありますが、入試制度が大きく変わって、民間の試験を適用するということは目に見えていますので、そういった意味では英検に限ったことではありません。他にもGTECだったり、ケンブリッジ英語検定だったり、TOEFL、TOEIC、色々ありますが、やっぱり何らかの形で子供たちが受けるチャンスというものが必要かなと思っています。

それから、受験料が高いです。2～3万円というものもいっぱいありますし、九州では福岡でしか実施しないというものもあります。地方の子供たちが不利益にならないように、受けられるように働きかけていく必要があると思っています。

【蒲島知事】

そろそろ時間が参りました。本日は大変貴重な御意見、御提案をありがとうございます。

今日は皆さんから一般的な議論と、ALTの議論と、そして英検の助成制度についての話（をいただいた）。この3つが大きかったと思います。

これを英語教育という意味で言えば、まず学ぶチャンスを与える（ということ）、それが使うことに結びついて、相互理解に結びつくのではないかなと。英語力は点数が上がるというよりも、もっと大きな意味があると思う。そして何か成し遂げたと、決して難しいことでもないのだと（分かる）、そういうこともあるので、ALTについては、全員が積極的に参加したいということであり、教育委員会のほうで遠慮しなくても良いので、全校配置になるようにと思います。

それから、英検の補助も弘済会の方が今年度を以て終了ですから、これで止めるというのではなくて、せっかく「英語力日本一」を目指してマニフェストにも書いたし、それが最下位のままならどうしようと思っていましたが、一瞬のうちに33位まで行ったので、次は私の任期中の最後の年度になりますので、そこで福井県と肩を並べていける

ようにと思います。そういうチャンスがないままになるのが良くない。そういうことで、しっかりと教育委員会の方から、財政課に（言って）、そして知事交渉がありますので、私の方も今日の皆さんの御意見を受けながら、ぜひ英語力を日本一に、少なくともそちらの方向に向かっていくということで、逆だと困りますけれども、順位も上がって良い方向だと思いますので、一緒にやっていきたいと思います。

そして、皆さまの活発な御意見により、本県の英語教育にとって非常に意義深い場になったのではないかと思います。私も自分自身の経験から、英語を話せる力を身に付けることが、まず外国人と接する機会、そしてそれが将来的な相互理解に結びつくと思っています。

英語力を強化していくことで、教育大綱にも掲げられている「グローバルな人材育成と海外への留学と国際交流」について力強く進めていきたいと思っています。本日の御意見・御提案を活かして、知事部局と教育委員会とが連携して取り組んでいきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

それでは事務局にお戻しします。